

はじめに

鍼灸による種々の疾患の治療は二千年の長きにわたって中国で行われてきた。我が国にも鍼灸は古く奈良時代に伝えられ、とくに江戸時代には広く普及した。

しかし明治維新により、社会のあらゆる分野で「西洋化」が急速に推し進められると、西洋医学が導入され、鍼灸治療を含む東洋医学は学問的根拠に乏しいとして一時は存亡の機に立たされた。

鍼灸治療の基礎となる中国古来の陰陽五行説は、しばしば理解しがたい荒唐無稽なものと思われてきた。しかしこの考えは誤りである。陰陽五行説が成立した現在から二千年以上前に、欧州の医学はどのような状態にあったであろうか。欧米で医学の父とされるヒポクラテスは、疾患の原因として「体液説」を唱え、人体は四種の体液を持ち、これらの間の調和が破れることが病気の原因であるとした。この説は現在から見れば全く「荒唐無稽」であり、実際に中世の暗黒時代を通じて欧州の医学の進歩を阻害したのである。

陰陽五行説、およびこの説から生まれた鍼灸の経絡説は、鍼灸の治療効果についての経験の蓄積から、人体に張り巡らされた「経絡路」のネットワークを考えた。この着想は、現在の医学の知識から見て、まさに「卓見」であった。なぜなら、このようなネットワークは実際に、人体に自律神経系、血管系、およびリンパ系として存在することが分かっているからである。経絡路の研究が現在も盛んに行われていることは、「経絡路」の考えが古代中国人の驚くべき叡智と洞察力の産物であることを示している。このことは本書のいたるところで触れるであろう。

古代から十九世紀にいたる約四千年間、中国医学は、鍼灸術と生薬（漢方薬）を車の両輪として、歴代王朝の支持のもとに連続と続いてきた。この状態が劇的に変化したのは、十九世紀の欧州における自然科学としての医学の確立と、病原菌の発見による感染症の征服であった。これは欧州のルネッサンス期の巨人たちが創造した自然科学の、医学分野における輝かしい成果であり、この結果人類の平均寿命は飛躍的に増大した。これにたいし、中国医学は残念ながら感染症については無力であり、欧州医学（西洋医学）の中国医学（東洋医学）にたいする優越は確立したかに思われた。

しかし時が流れ、「長生きするようになった」人々の前に立ちはだかっただのが、成人病あるいは生活習慣病と呼ばれる中高年者の難病である。現在よく知られているように、これらの疾患は身体の自律神経系、内分泌系の障害によって起こり、感染症に威力を発揮した西洋医学の研究法

では解決困難なことが認識されるようになった。ここで中国医学が注目を浴びる機運が熟してきたのである。

この生活習慣病の蔓延を契機として、東洋医学と西洋医学を統合する歴史的役割を果たしたが、カナダの生理学者、ハンス・セリエによる「ストレス学説」の提唱である。「ストレス」は今や日常語となった。成人病とは個々の人々のストレスによって起こるが、そのストレスの原因は文字通り千差万別である。そのため、疾患の原因を個々の人の固有の身体の変調と捉え、経路に物理的刺激を与えてこれを治療する鍼灸が、西洋医学の行き詰まりを打破する手段として再評価され始めたのである。

一般には、一九七二年に米国大統領ニクソンが訪中し、鍼麻醉による無痛出産を目撃して感銘を受けたことが鍼灸の世界的な広がり契機になったとされているが、実際にははるか以前から欧州各国で鍼灸技術と鍼灸効果の研究が着々と進められており、ニクソン訪中と同じ年に世界保健機構（World Health Organization、略称・WHO）は鍼灸技術を正式に医学として認めた。以後、鍼灸効果の研究は世界各国で盛んに行われるようになり、学会での発表や学術誌への論文発表が相次いでいる。しかし鍼灸効果は、体性神経系、自律神経系、心臓血管系、リンパ系などの関与に加えて、プラセボ効果、実体不明の経絡路など数々の謎を含み、この解明はまだ緒に付いたばかりである。

本書はこの学問的に大きな広がりを持つ鍼灸効果の謎と、これにたいする科学者の挑戦の現状を分かりやすく解説するために書いたものである。この目的のため、まず鍼灸効果の研究の説明に先立ち、ニューロン、インパルスの伝導、興奮性および抑制性シナプス、反射回路など、生理学の基礎知識について説明した。

筆者はこの鍼灸分野の方々と縁が深く、鍼灸効果を反射として捉えた先駆者、故佐藤昭夫・東京都老人総合研究所（現・東京都健康長寿医療センター研究所）教授とその一門の方々とは現在も親交があり、また我が国の鍼灸研究、鍼灸師育成に尽力されている矢野忠・明治国際医療大学特任教授は、筆者の研究室で医学博士号を取得された。さらに、現在ベルリンで鍼灸治療に活躍中のトーマス・グロス氏も、以前筆者の研究室で研究に従事したことがあった。

また筆者は以前、鍼灸効果について拙著『現代医学に残された七つの謎』（講談社ブルーバックス）で論じたことがあり、現在も鍼灸師の方からこの分野の研究の進歩についてお訊ねを受けることがある。本書はこのような専門家のご質問に対しても、ある程度お答えできたのではないかと思っている。さらに本書の一般読者が、鍼灸効果の奥深さと面白さを感じていただけるのなら、筆者にとって望外の喜びである。